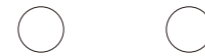


## ボランティアは県美の「宝」

守安 収

12月3日の夜、100人[当番班(館事務補助含む)70人、専門班22人、休会8人]が登録する県美ボランティア主催の忘年会が開かれました。今回の幹事は26期生の面々。職員も含めて50人ほどが参加しました。全員の1分間自己紹介や県美あるあるクイズといった企画も交えて盛況のうちにお開きとなり、皆さんお疲れ様。▼ボランティアは当館の「宝」です。開館(1988年)の前年、欧米の美術館視察から帰国した小野年之氏(初代館長)の第一声が「ボランティアを導入する」でした。どういう役割、どんな組織にするかを十分討議する暇もなく、先行館を参考に急発進。当時の岡山にはボランティアという概念が定着していなかったため、人材が集まるのかという不安を抱えての募集開始。ところが、定員50名のところに5倍もの応募者。書類審査と面接で、「ボランティアになりたい」という方々に「私よりきっと優秀」と認めながらも館の都合で「あなたは不要」という引導を渡すのは本当に辛くまた残念なことでした。いまだにそのもやもやが晴れません。▼その時に入った1期生は開館前から何事も職員と一緒に取り組みました。そこで現役2名はもちろんのこと、卒業生の多くはいまだに館と親しくつながっています。それに対し、申し訳なかったのが2期生への対応。忙しさもあって何とかならせようと楽観視し、館としての面倒見が不十分でした。それ故でしょう、多くの方が早々に卒業されました。ボランティアを受け入れるには覚悟があることを痛感しました。これからも素晴らしい県美ボランティアの皆さんたちと一緒に歩んでいけたらと願っています。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48  
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648  
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp  
http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/

交通案内 JR岡山駅東口から  
・徒歩約15分  
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分  
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分  
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00(入館は16:30まで)  
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

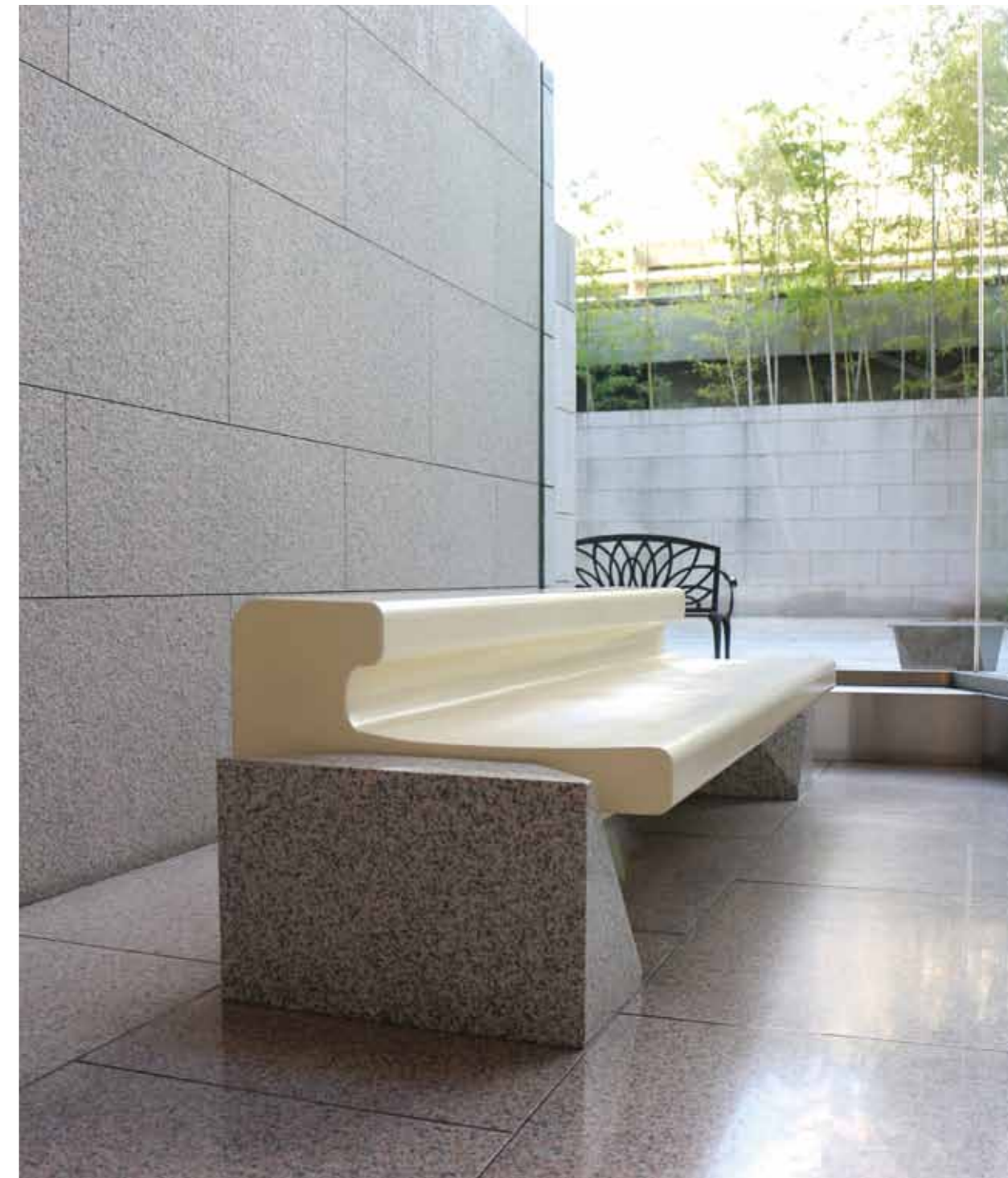
## 編集後記

大山真季

美術館ニュース111号をお届けします。例年になく暖かな気候のなか2016年を迎えました。この時期になると広報媒体各所から今年1年間に開催する展覧会スケジュールについてお問い合わせを頂きます。2016年は年をまたいで開催となった宮忠子展に始まり、2月からは雑誌やCDジャケットなど多岐にわたり活躍したファッションイラストレーター森本美由紀の回顧展が開催されます。ミュージアムショップでは本展オリジナルグッズも販売予定となっておりますのでお楽しみに。4月以降の展覧会情報については3月上旬頃から順次WEBサイト等で公開していきます。

## 「美術館の紹介」vol.11

館内の踊り場に設置された独特の断面のベンチは、他の岡田建築にも使用されている。背もたれの部分は、背骨の曲線に沿って設計されているため、背筋の伸びた美しい姿勢をサポートする。シンプルでありながら実用性に富んだデザインである。



# 大久保英治氏と歩く ～木喰上人によせて～

中田 利枝子(学芸課長)



7月4日に歩行した、東岡山から城下までの道中で拾った収穫物を利用して作品制作を行った(2015年7月11日)

2015年7月17日から8月23日まで開催した「円空・木喰展」を機に、木喰上人(1718-1810)が歩いた道を、造形作家大久保英治氏と一緒に歩行するワークショップを開催しました。木喰上人は天明7(1787)年、寛政10(1798)年の2度、岡山県を通過しています。

少年時代を矢掛町で過ごした大久保氏は、1980年代から自然や時間をテーマに、自然の中で得た素材や感動を、自然の中で表現してきた作家です。このような現代美術のジャンルは「ランドアート」と呼ばれています。「歩くことは芸術たり得るか」をテーマに制作を続け、1日に40km歩くこともあったという健脚でもあります。四国八十八カ所を歩行し徳島県立美術館で発表したほか、ヨーロッパ、アジア、アメリカなど世界各地で制作してきました。その大久保氏が近年注目しているのが、木喰上人です。北海道から九州まで何度も歩き、各地で微笑みに満ちた独特の存在感のある仏像や神像を残した木喰上人は、衆生救済をうたう一方で、茶碗の酒に酔い、ノミやシラミを身にまとい、天真爛漫な歌を詠みながら老いをもとせず歩き続けました。その姿にすごく親しみを感ずると大久保氏は言います。

ワークショップを実施するにあたり、まずは事前に、鳥取・岡山県境の人形峠から岡山まで、兵庫・岡山県境の志引峠から和気までを、大久保氏とともに車でたどってみました。しかし、木喰上人の時代の道を、今日車道から探すのはなかなか難しいことでした。考えてみれば、移動や輸送の手段は歩行・牛馬・船舶のみの時代が前世紀まで続いたにもかかわらず、自動車が普及するとトンネルが山を貫通し、田圃の真ん中を広い道路が突っ切るようになりました。特に昭和40年代に入ると、山際の細い道や、家が建て込んだ狭い路地を通過することは少なくなりました。昔の道標など探してなんとか木喰上人が実際に通過した道を探そうとするのですが、今や崖、藪となっていることが多く、車の乗り入れが不可能な狭さの所ばかりで、モータリゼーションがいかに日本の風景を変えてしまったかを実感することとなりました。

さて初回のワークショップは、7月4日、高島八幡宮(岡山市中区八幡)から山陽道をたどり岡山の城下町へ入る約10kmのコース。大久保氏は前日に瀬戸町から東岡山駅までを歩行済みで、当日はその延長。今にも空が泣き出しそうな天気でしたが、原尾島、国富の少林寺、京橋を渡り西大寺町から城下までを完歩しました。参加者は道すがら草木や石、瓦礫など、心



7月3日 瀬戸町から東岡山を歩行



7月4日 ①高島駅前出発



7月4日 ②原尾島にて



10月10日 ①吉備津彦神社出発



10月10日 ②庭瀬八幡宮にて

引かれるモノをビニール袋に集めました。後日、参加者は大久保氏のアドバイスを受けながら、これらの収穫物を使って、歩行を形にすることに挑戦しました。

2回目のワークショップは、10月10日、吉備津彦神社(岡山市北区一宮)から金毘羅道をたどり茶屋町(倉敷市)までの約16kmを歩きました。吉備津彦神社、吉備津神社、庭瀬八幡宮と、吉備の中山の麓をたどる辺りは名所旧跡も多く、のんびりとした「晴れの国」風景。この辺りでは会話ははずみ、穏やかな吉備の国の風光を感じることが出来ました。庭瀬から早島町に越える峠道はなかなかきつく、谷の向こうに見える道らしき痕跡がどうも昔の道のように見えていたのですが、とても歩ける状態ではありません。こちら側の道はあまり広くもないのに、轟音を上げてトラックが猛スピードで行き交う、歩くのに本当に危険な道でした。木喰上人の時代にはこういった恐怖は無かったに違いないと思いつつ、やがて口数も少なくなったころ、ようやく早島町を横切る金毘羅道の狭い路地たどり着き、ほっとしたのでした。

この2回のワークショップで、大久保氏と何人かの参加者は、長さ20cm位の角材をテグスで腰に結び、引きずって歩きました。引きずられる角材は歩くに従い、角がとれ、丸みを表し、表面には凸凹が生じて木の繊維が見えてきます。土地ごとに特有の土や石、水や植物、土の上に存在する何か、そういったモノに関わり合って、歩いた時間と距離がその木材に蓄積し、表情となりました。それは人の意志によって作られたものではなく、人が自然と関わり合うことによって生み出されたものです。木材は優しく穏やかな丸みをまとっていました。歩行は芸術たりうるか、思索することがまた人間らしさかなと感ずると同時に、彫った仏像が子供のソリ遊びに使われて、顔も分からないほど摩耗してつるつるになったのを、これも良いと喜んだという木喰上人の逸話を思い出しました。

このあと、2016年春には、木喰上人が天明7(1787)年5月16日に四国行きの船に乗り込んだ下津井港を目指すワークショップを予定しています。ご一緒に、歩行の記憶を心と形にとどめてみませんか？

## 岡山の作家☆再発見Ⅰ 宮 忠子展

廣瀬 就久(学芸員)

当館では、岡山ゆかりでありながら、広くは知られていない、作家や作品を紹介する特別展示として、「岡山の美術☆再発見」を開催します。第1回目として、宮忠子(1931-)を取り上げます。

宮忠子は、現在の岡山市南区迫川町に生まれた画家です。山陽女子高等学校を卒業したあと上京し、武蔵野美術学校[現在の武蔵野美術大学]西洋画科を卒業しました。その後岡山に戻り、1970年代から、風景や植物を、紙の上に墨で描く作品を制作しています。移ろう四季、光と影、吹く風、滞る空気と水の湿りなどに、自然の豊潤な姿を見ることができます。

文筆家で現代画廊の廊主であった、洲之内徹(1913-1987)の目に留まりました。彼が遺した「洲之内コレクション」のなかに、宮忠子の作品が1点あります。これまで画廊における発表歴が長かったです。そして昨年、初めての画集が刊行されました。

様々な画材のなかで、なぜ墨と紙を選んだのでしょうか。明暗や自然のたたずまい、季節の移ろいは、見ていて飽きないところ。通例の「水墨画」「墨絵」とは、異なる印象を持ちますが、どのように捉えればよいのでしょうか。このようなことを考えながら、展覧会を準備していました。

美術館では初めての個展で、40点余りの作品を紹介します。墨と紙による、静かで深い世界をごらんください。また夫であった画家、宮俊彦(1928-1994)の作品も、あわせて展示します。

岡山の作家☆再発見Ⅰ 「宮 忠子展」

会期:12月17日(木)-2016年2月7日(日)

会場:地下展示室

休館日:月曜日(祝日の場合は翌日)、

年末年始 12月28日(月)-1月4日(月)

観覧料:一般350円、65歳以上170円、大学生250円、高校生以下無料



『宮忠子画集 風について』  
価格:3,200円(税抜)  
発行元:求龍堂  
※当館ミュージアムショップ  
「KENBI CIFAKA」にて販売中



《吉備津彦の杜》1991年頃 ©Tadako Miya



《えのころ草》制作年不詳 ©Tadako Miya

## 学校×美術館 —多様な気づき—

岡本 裕子(主任学芸員)

先日、岡山市立岡山中央小学校5年生4クラスの美術館学習を実施しました。講師に赤松玉女氏(煎茶道一茶庵直門教授)をお迎えし、煎茶の世界(掌の手前-水注式-)を体験した後、美術館スタッフとともに日本伝統工芸展を鑑賞するという計100分の美術館学習、そして、美術館学習の体験を俳句に詠むという事後学習つきのプログラムです。5年生の国語科で俳句の学習をしていること、そして文人趣味に倣って俳句を取り入れました。同校は、美術館まで徒歩10分という立地条件を活かして1年生・3年生・5年生で美術館を活用されています。各学年の発達段階にあわせながら、作品をみるためのアプローチを学校と事前確認し、今回は煎茶文化体験を取り入れました。煎茶席には、五感を通して季節の移り変わりを感じ取ることができるよう、また日本伝統工芸展の鑑賞につながるよう、様々な素材を用いた煎茶道具や文人画、花、干菓子などをしつらえました。さらに赤松氏は、煎茶文化が持つ力を子どもたちに伝えたいという思いを込めて『冬菊の まとうはおのが 光のみ』(水原秋桜子)を児童に紹介し、プログラムを締めくくられました。

「静けさと 文化おもわす 茶のかおり」

—俳句にこめた気持ち—

煎茶体験が始まると、時間が止まったような静けさがひびきわたり、お茶をいれるときの上品な作法に、昔の人の美しさがおもいかびました。それと同時に、深く苦みのあるお茶の香りに心が安まる感じがありました。また、日本伝統工芸展では、古くからの習わしにそった美しい作品や、新しい世界を切り開くようなミステリアスな作品が色々ありました。中でも私は《青白磁鉢》という作品がよかったです。すごくシンプルではあるけれど、なめらかな曲線に心をひかれました。

「菊の花 自分を見直す 合い言葉」 「かけじくを みなで飲むお茶 おいしいな」

「巻物の 紅葉のもみじ 干菓子かな」 「煎茶と五感 いっしょに感じる 岡山の秋」

「煎茶飲み 五感をすませば 秋香る」 「のびをして 見上げてみると 秋の空」

「若鮎が ガラスの川で 泳いでいる」 「備前焼 色ももようも 秋近し」

「美術館 伝統文化 見つけられた」 「美術館 ダイアのように 光っている」

これらは児童が詠んだ俳句の一部です。五感を使って感じるということについて、煎茶文化体験を通して鑑賞した日本伝統工芸展について、日本の伝統文化についてなど、美術館学習を体験して“自分なりの気づき”を俳句に詠んでいる姿を感じることができます。児童の生活経験値や学校での学びが、本物の持つ力に触発されることによって発揮されたのではないのでしょうか。「学校×美術館」では、一つに集約される気づきではなく、児童・生徒一人ひとりの思考に即しながら、“多様な気づき”が自ずと起こるような“場づくり”を大切にしていきたいと思っています。



赤松玉女氏のお話



掌の手前を楽しむ児童



日本伝統工芸展を鑑賞する児童

## 新収蔵品紹介

### File 07

岡山の画師 白神皞々  
中村 麻里子(主任学芸員)



白神皞々《花卉図巻》部分 天保13(1842)年

2015年10月に江戸時代後期の岡山県出身の画人白神皞々(1777-1857)の作品7点および関係資料4点計11件をご遺族から寄託を受けた。皞々の画業を検証する貴重な資料であり、その概略を紹介する。

皞々は備中窪屋郡中島村(現倉敷市)の豪農である白神昌房の長男として生まれた。名は昌保、字は子興、はじめ鯉山のち皞々と号する。若年期に玉島の黒田綾山(1755-1814)に学び、同門の岡本豊彦(1773-1845 号鯉嶠・丹岳ほか)と画技を競い合ったと言われる。その後度々上京して四条派の柴田義董(1780-1819 現邑久町出身)の指導を受け、のち再び文人画に転じ、沈南蘋風をはじめとする中国明清画を積極的に摂取したが、その傾向は晩年まで続く。40代半ばには中島村を離れ、京都に居を移し、さらに播州高砂、但馬国生野、大坂に仮寓、弘化2年(1845)帰郷、81歳で亡くなった。晩年の様子は同郷の三島中洲の碑文によって知ることができる。

今回寄託された《花卉図巻》(天保13年・1842)は、皞々の代表作の一つと目されるもので、66歳の作。沈南蘋風の濃彩による精緻な作品で、蠟梅・牡丹・石榴・菊・蓮・菖蒲・薔薇・鶏頭・甘草・木蓮など色鮮やかな花々が細部まで描き込まれている。儒者古賀精里(1750-1817)による題字「皞々居」に始まり、花々の描写、頼山陽(1780-1832)による跋文でしめくられる。

この《花卉図巻》の他に、頼山陽との強いつながりが示される資料が2点ある。山陽書「皞々居」〔文化9年(1812)・額装〕は、皞々36歳・山陽33歳時のもの。また山陽筆《寒林漁舍図》〔文政3年(1820)〕の画面左上には、山陽による賛「甲戌孟冬念五日／在倉敷旅寓独坐／無□会／皞々主人至強余／作画因為寒林漁／舍以叟興／主人善画必笑余／拙也 頼襄」が賦されており、2人の交流が偲ばれる。

この度の寄託作品は『岡山県立博物館研究報告6号』(1985)守安収「黒田綾山とその門人」に紹介され、1988年開催の「岡山県立美術館開館記念展 岡山の絵画500年」に《花卉図巻》他1件、1998年、京都文化博物館で開催された「京の絵師は百花繚乱」展に同じく《花卉図巻》が出品された以外は、人目に触れる機会がなかった。当館では、これまで皞々作品は計4点の寄託作品を取蔵していたが、いずれも60～70歳代の山水画であったので、この度の寄託によりバリエーションが大きく広がった。これらは皞々の画業はもちろんのこと、岡山における四条派・文人画の動向を理解するうえで、貴重かつ有意義なものと言える。近い将来まとめて紹介したい。

※この件に関しましては、岡山県立博物館・和田剛氏に情報および画像提供他多大なご協力を得ました。御礼申し上げます。

## 展覧会スケジュール

12月  
December

1月  
January

2月  
February

3月  
March

12月17日|木|—2016年2月7日|日|  
【岡山の美術展】宮忠子展

展覧会期間中、当館学芸員による  
ギャラリートークや美術館講座など  
随時開催予定。詳しくは当館HPまで。  
<http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/>

1月10日|土| 10:00/11:00/13:30/14:30  
1月11日|日| 10:00/11:00

workshop

「石で遊ぼう 日だまりの砂場」

講師 北川太郎(造形作家・京都文教短期大学特任講師)

広瀬浩二郎(国立民族学博物館准教授)

会場 屋内広場 ※無料

1月22日|金| 18:00～19:00

美術の夕べ

「宮忠子展」をみる

講師 廣瀬就久(学芸員)

会場 地下展示室 ※要観覧券

1月30日|土| 14:00～15:00

記念講演会

「宮忠子の絵—これは水墨画なのだろうか？」

講師 野地耕一郎(泉屋博古館 分館長)

会場 地下一階講義室 (先着70名)

2月10日|水|—3月21日|月・振|  
【岡山の美術展】

イラストレーター

森本美由紀 回顧展

3月18日|金|—5月8日|日|

【特別展】

世界を魅了した陶芸家 宮川香山

虫明焼と明治の陶芸

宮川香山(1842-1916)は初代楽長造の四男として京都真葛原(現東山区)に生まれました。父の跡を継いで陶業を始めた香山は、明治初年、備前で虫明焼の指導にあっています。その後、横浜へ移住し眞葛窯を開窯、職人たちとともに輸出用陶磁器を製造し国内外の博覧会で輝かしい成績を取め、明治を代表する陶芸家として活躍しました。

本展は、2016年に没後100年を迎える宮川香山について、本県虫明焼の歴史とその発展に寄与した香山を顕彰し、日本の近代窯業界の寵児として世界に名を馳せた香山の優品を紹介します。